日本細末端真実紀行

椎名誠

角川文庫

日本細末端真実紀行

椎名 誠

角川文庫 6364

昭和六十一年五月二十五日 初版発行
昭和六十二年十一月十日 十一版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話 編集部(〇三)二三八—八四五一
営業部(〇三)二三八—八五二一
〒一〇二 振替東京③一九五二〇八
印刷所——厚徳社 製本所——文宝堂製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan

ISBN4-04-151004-X C0195

日本細末端真実紀行

椎名誠

角川文庫 6364

目次

美女同伴逆上キリキリ温泉旅　五
神戸異人館をわっせわっせと駆けめぐる　二〇
札幌のキャバレーで突発的な愛をみた　三五
あてもなく北に湯煙りまどろみ旅　五一
倉敷は今日もウスラバカだった　六六
八丈島ヤキニク酒宴の夜は更けて　八〇
飛騨高山随筆紀行ブンガク旅　九五
日本列島ばか食いジグザグ三人旅　一一〇
瀬戸内ぶらぶらヒルネ旅　一三〇
渋谷スペイン通りはハズカシ通り　一四五
団体大宴会潜伏大作戦　一六〇
陸前江の島は夏の演歌のかえり船　一七七
雨降りだから高層ビルに登った　一九一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

八丈島フシギホテル物語　二〇五
幕張へ人工海岸をみにゆく　二一八
網走は今日もさむかった　二三一
千葉のダム湖で焚火の宴　二四二
解説　沢田康彦　二五三

本文イラスト　沢野ひとし

美女同伴逆上キリキリ温泉旅

長野県の上田でグループ講演というのをやることになった。

いきさつはよくわからないけれど、とにかく仕事でよくこの町に行く沢野ひとしが、頼まれてきたものだ。

グループというのは、ぼくが隊長をやっている「東日本何でもケトばす会」〝別称＝わしらは怪しい探険隊〟、というその名の通りあやしげな集団のことで、海や山にテントをかついでドカドカと出かけて行っては焚火を囲んでひたすら酒をのむ、というそういうことをもう十五年も続けているのである。

長野県のこの上田からは別所線という一輛ないし二輛のまるで柴犬のようにかわいらしい私鉄電車が出ていて、三十分ほどで終点の別所温泉というところに着く。

「ここがもう実にいいところなのだよ」

と、ウスラバカの沢野が力をこめて言うのである。

「講演が終ったらみんなしてここに行ってね、つまりオンセンにつかり、酒をのんで歌でも

うたって、場合によったら踊りのひとつふたつもやってしまおうト、踊りはカッポレでも東京音頭でもなんでもいいト、まあそういうことをたまにはやろうじゃないかト、そう考えたのだよオレはね」

と、沢野は言うのである。

「うーん」

と、おれは言った。こういう場合のうーん、というのは、まあなかなか面白そうだけれど、しかしどうもいまひとつな……というかんじのうーんなのである。

いつも四ッ谷や新宿で顔を合わせて酒をのんでいる仲間と改めて温泉に入ってのんでさわいでも果してどうなのであるか、という「うーん」なのである。それならその分新宿で二、三軒余計に店を回った方が話は早いじゃないの、という「うーん」なのである。

「だからね、オレはさらに考えたのだよ。おれたちだけで温泉につかって酒のんでもちょっとあまりにもワビシイというかんじであるから、ここに何人か若い女のコに同行してもらって一緒にのむト、まあそういうことを考えたのだよ」

「うーん！」

と、おれは言った。今度のうーんはあきらかにさっきのうーんとは調子が違っていた。今度のはつまり「うーん、なるほど！」というあからさまなオドロキヨロコビのうーんなのである。

「うーん！」

と、おれはもう一度言った。

「いいではないか！」

と、横あいから圧倒的な賛成の声をあげたのは天才バカベンの木村晋介であった。この人は本当はバカなのだが二十二歳で司法試験を通ってしまい弁護士になってしまったので天才的なバカなベンゴシなのである。したがってみんなから天才バカベンと呼ばれ局部的にうやまわれている人なのである。

「行こう行こう！」

と、その木村バカベンは言った。

「行こう行こうそういうのならどこへでも行っちゃおう」

とさらに激しく叫んだのがP・タカハシであった。この人は某大手週刊誌のデスクをやっており、酒と大騒ぎがとにかく大好きなのだ。

「よし、オレも行くぞ」とめったに明るい眼になったことのない本の雑誌の青年社長、目黒考二が二年半ぶりに目を輝かせて言った。思えばみんな暗い青春時代を歩んできたオジサンたちなのであった。

この目黒君は「怪しい探険隊」では名人・釜たきメグロといわれており、沢野ひとし炊事班長とともにわれわれの海辺のキャンプ生活に欠かせない男なのである。

「行こう行こう！」

と、オジサンたちは明るい顔をしてみんなで言った。

その日、プロモーターの沢野ひとしはきちんと美女を四名も揃えて上野駅に登場した。しかもうれしいことに美女Ⓐは上等のワインとブルーチーズ、美女Ⓑはつめたーいカンビールと海苔のオニギリ、美女ⒸⒹはこぼれるような微笑をついにボトボトとこぼしながら「よ・ろ・し・く」などと口をそろえて言うのである。

われわれは早くも限りなく逆上しながら、一路信濃の国へと急いだのである。

めざす会場は、上田の飲み屋が集結している路地の奥の、青少年会館というようなところであった。

すこし早く着いたので近くの喫茶店でコーヒーをのむ。こういう発作的な集団の突発的よもやま話会などというものに果して理智的な長野県上田の人々というのは何人ぐらいやってくるものなのであろうか。

「お客が三人ぐらいだったらどうしよう。こっちは五人もいるからオレたちの方が多くなってしまうじゃないの」

「せめて五対五ぐらいでいてほしいね」

「まあしかし笑えるいまのうちにせいぜい笑っておこうぜ」

などという暗い会話をボソボソと交しているうちに時間になった。なんとなく売れないプロ

レスの地方興行、というようなかんじでもある。

会場は小さなステージのついている明るく清潔そうなところであった。幸い人数もわれわれよりははるかに客の方が多く、一同ホッと胸をなでおろしたのである。

そうして話はどんどんすすむのであるけれど講演は無事に終って、主催者側のオジサンがさらに二名加わり、われわれはいよいよめざす別所温泉「花屋ホテル」に向かった。

別所温泉というのは千年以上の古い歴史を持つ湯で、清少納言の枕草子にも「湯は七苦離、有馬、玉造……」

と記されている名湯であるという。七苦離というのが別所の古い呼び名である。しかし七苦離なんてなんだかいかにも苦しそうな名前だ。

現在のこの別所というのも実は問題があって、歴史のある名湯としてはぜひとも新婚旅行などを沢山呼びたいところなのだが、なにしろワカレドコロというふうにも読める〝別所〟という名称がどうも新婚旅行の足を遠ざけているらしい。

「じっさい頭の痛い問題なんですよ」

と、道々クルマの中で講演主催者側の人に状況説明を受ける。

九時すぎにホテルに着いた。ホテルといっても総木造りのいかにも由緒ありそうな純日本調の旅館である。

こんなふうに大勢で泊るという場合は、まず部屋に入る時が騒々しい。みんななんとなくコ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

コロが浮き浮きしているからである。これから久しぶりにあつーい温泉に入って、そうしてまずつめたーいビールなど飲んで、そのあとどうしようかな、日本酒のヌルめの燗がいいかな、氷でキリリと特級スコッチの水割りでいこうかな、どうしようかな、どっちにしようかな、どっちにしろ楽しみだな、うーんたまんないな、というような、ともかく全面的にヨロコビの感覚がそれぞれの人々の全身をかけめぐっているステキな時なのである。

ところがであった。

こういう観光地の旅館で九時すぎ、というともうあらかたのお客の宴会は終っていて、宿の人はあちこちの部屋の布団を敷いたりしてそろそろおやすみの準備に入る頃なのである。そういう時間に「うひゃあ、ハラへったあ、あつーい温泉に入ってまずはビールビール！」と圧倒的な迫力をもって、ドカドカと入りこんでいったのである。よろこばれるはずはないのである。しかしそうではあってもその日のわれわれの部屋を担当したコメカミピクピクのオバハンはこわかった。

「あのね、もう遅いんですからね、早くして下さいよ、早く早く。え？　お風呂が先だって、それじゃ五分にして下さいよ。一人五分。五分五分、早くして下さいよ。早く早く！」

と言いながらともかくせわしないのである。シャワーあびて髭剃るんだって十五分か二十分はかかるだろうに、はるばる温泉にきて五分ですよ早く早くなんてないよな、とブツブツつぶやきつつ、それでもみんなしてワッセワッセと五、六分で風呂からあがる。

さあて、いよいよお楽しみ大宴会のはじまりなのである。

考えてみるとこういう温泉旅館での宴会は久しぶりなのである。サラリーマンの頃は秋の旅行とか忘年会などでよく飲めやうたえやの大騒ぎをやっていたが、ああいうものは経験できなくなるとなぜかやたらとなつかしくなるものである。

みんな浴衣をきてそれぞれ配膳の前にどっかとアグラをかいてすわる。美女ⒶⒷⒸⒹは女の長風呂そのままにまだやってこない。

「こう、のんべんだらりと酒をのんでもつまらないからやっぱりこれは中小企業社員旅行風にきめてみたいね」

と、P・タカハシが言った。

「いいですね、とりあえず社長と専務を決めようではないの」木村バカベンが言った。

協議の結果釜たきメグロを社長にすることに決まった。彼のそのなんともいえない暗い目が日本の中小企業の苦悩そのものだ、という圧倒的な支持を受けたのである。もっとも釜たきメグロはまぎれもなく資本金二五〇万円、社員三名の日本で一番小さな雑誌社の社長なのである。

美女ⒶⒷⒸⒹは全員新入社員のお茶くみ、ということにした。そのお茶くみたちがやってきて間もなく一同乾杯。

さっきの「早く早く」のオバハンがやってきて「ゴハンどうしますか、持ってきちゃっといていいですか、早くたべますか」と鋭い目で木村バカベンに聞いている。彼はちょうどこの会

社の総務課長ふうで今夜の宴の幹事にでも見えたようなのである。

「ハッ、いただきます、もういただけるものならなんでもいただきます」と木村バカベンはきちんとかしこまりバカ丁寧に答えている。

「さあ、それではぐーっと盛りあがりましょう！」

宴会というとにかく盛りあがらねばならない、という使命にひたすら燃えているP・タカハシがひときわ大きな声で叫んだ。

みんなウグウグ、グビグビと眼の前の酒をのむ。しかしその宴会場はざっと百人は座れる大広間であり、そのまん中にわれわれ九名が宴会を張っているのだが、どうもなんだか太平洋をイカダで流されているようなかんじがして寒々しい。

P・タカハシがしきりに盛りあがりましょう盛りあがりましょう、と叫ぶのだがそうそう簡単に盛りあがれるものでもない。しかもちょっと油断しているとあの早く早くのオバハンがやってきて素早くわれわれの配膳の上のあたりを点検し、また素早く去っていったりするのだ。

そこで研究討議の結果、われわれは全員自分の配膳を持って大広間の隅に行き、そのコーナーに改めてこぢんまりとした宴席をつくることにした。不思議なことにそうするとようやくすこし気分が落ちつくのである。

どうもやはりこの急造りの会社は本当にまったく悲しいまでに中小企業そのものの体質をあらわにしているようなのである。そして社長の釜たきメグロは前の日に徹夜してしまったとか

美女A
この子たちも温泉にいれたいの
最近の王子さまスタイルの美女B
おそくなりました
温泉にきた時ぐらいのんびりしたい
とにかく早く早く
若いくせになんですか
風林火山

で、暗い目をしたままひと足先に自室に行って寝てしまった。どうもこの会社は間もなく倒産、という気配にもなってきたのである。

しかもせっかく温泉旅館で美女ⒶⒷⒸⒹとともに宴席を囲む、という状況になっているのに、なんとなく男は男同志、女は女同志というふうに集まってきてしまい、まるで中学生のクラス別謝恩会、というようなかんじになってきてしまったのだ。

「盛りあがらないねえ、いまひとつ盛りあがらないねえ」

と、P・タカハシは嘆き、こころみに木村バカベンが「ハア、キタサア、キタサア」などと無理やり景気をつけようとするのだがその拍手はまばらにあくまでも白々しく夜ふけの温泉旅館大広間に消えていくのであった。

しかしそれでも翌日はカラリと晴れて気分のいい朝になった。帰りの特急指定券は午後四時なので、その時間までゆっくり塩田平（しおだだいら）のあたりを歩いてみよう、ということになった。

塩田平と別所温泉のあたりは信州の鎌倉（かまくら）と言われており山沿いの小道にいろいろな古社寺が並んでいる。

せっかくここまできたのだからそういう静かなところを歩き、おそらく無理だろうとは思うけれどそれでも一応こころざしはきびしく、それぞれの人生のことでも考えながら歩いてみようではないか、ということになった。

人生のことを考えるにしてはあまりにも陽気でうれしそうな顔をした沢野ひとしを先頭にま

ずは信州最古の木造建築、中禅寺にむかった。続いて〝鬱蒼たる樹々の神域〟という素晴しい解説文のある塩野神社へ、そして竜光院、前山寺と進む。こう書くとあっという間に通りすぎてしまったようだがまさにそうだったのである。

「やっぱり神社というのはいくつ見ても基本的に盛りあがらないもんだねえ、うーん、ぜんぜん盛りあがらないねえ、ダメだねえ」というP・タカハシの牽制によってわれわれ一行はむなしくどどどっとこれらのまわりを眺め、素早く通過してきてしまったのである。

あまり早く歩いてしまったので寺社見物の終点前山寺で時間がたっぷり余ってしまった。美女ⒶⒷⒸⒹはこの寺の名物であるくるみオハギをたべに行き、われわれは日なたぼっこをした。どうも今回の旅はあくまでも中小企業の老齢社員慰安旅行というかんじがつきまとうのである。

前山寺の山門のところに私設の「デッサン館」があってそこでおいしいコーヒーがのめると聞いたのでさっそくわれわれはそこにむかった。

デッサン館でTBSのアナウンサー小島一慶さんとバタリと顔を合わせた。このひととはだいぶ前にラジオの番組で、二人で大和路を一時間にわたって歩き回り、目に入るものをナマで放送するというちょっと異常な仕事をやったことがあるのだ。

「やあやあやあ、こんなところで！」

と小島さんは言った。

「やあやあやあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com